

## ひらがな文字の形態的類似性について

心理学部 発達教育心理学科 川上 正浩

【問題と目的】 視覚呈示された単語の認知に際して、それと類似した他の単語の存在が及ぼす影響が検討されている。特に欧米諸言語においては、「当該単語を構成する文字を一文字だけ別の文字に置き換えることによって作成可能である単語（たとえば same に対しての name や some）」と定義されるneighbors（以下類似語）が、当該単語の認知過程に及ぼす影響について盛んに議論がなされている。

単語認知過程モデルと類似語効果とは密接な関係にあり、単語認知過程の解明を目指す研究者にとって、類似語効果を明らかにすることは急務である。

しかしながらこれまでの類似語研究においては、類似語を形態的に当該単語と類似した単語であると規定しながらもその類似の程度に関しては注意が払われてこなかった。こうした検討を十全におこなうためには、類似語間の形態的類似性を定義することが必要であり、またこれに関わるデータベースの整備が必要となる。たとえば、単語「ハイク」の類似語として、単語「マイク」や「バイク」を挙げることができるが、「ハイク」と「マイク」の形態的な類似性と「ハイク」と「バイク」の形態的な類似性とは異なると考えられ、それゆえ、単語「ハイク」の認知に際して単語「マイク」の存在が及ぼす影響と単語「バイク」が及ぼす影響とは、異なるものであることも考えられる。

そこで川上（2002）は、カタカナ文字の形態的類似性を、任意の2文字に対する主観的評定によって定義することを提唱し、カタカナ文字間の形態類似性評定調査を実施した。

川上（2002）はカタカナ文字71文字を選択し、これら71文字のカタカナ文字のうち任意の2文字の組み合わせにより、2,485組（ $= 71 \times 70 / 2$ ）のカタカナ文字対を作成した。そして、これらのカタカナ文字対を大学生に呈示し、各カタカナ文字対に対する主観的な形態的類似性評定（1（全く類似していない）から5（非常に類似している）までの5段階評定）を求めた。調査の結果、カタカナ語を対象とした心理学的実験を行う際の形態的類似性に関する基準となるカタカナ文字の形態的類似性に関するデータベースが作成された。

一方近年、発達心理学的な、あるいは認知発達心理学的な視点からも、幼児を対象とした言語認知実験が多数行われている。こうした場面でも、文字間の形態的な類似性は、その処理に影響を及ぼす要因であるが、特に幼児等を対象とした実験の際に用いられる刺激文字であるひらがな文字については、その形態的類似性は報告されていない。

そこで、本研究においては、川上（2002）に倣い、ひらがな文字間の形態的類似性調査を実施し、その基準表を提供することを目的とする。具体的には、ひらがな文字の任意の2文字間について、5段階評定法を用いて、その平均的な（主観的）形態的類似性のデータベースを作成することを目的とした。

【方法】 本研究は、基本的に川上（2002）の調査の「ひらがな版」とするが、ひらがなを対象とすることを鑑みて、使用する文字を若干変更した。具体的には、ひらがな表記語あるいはひらがな表記文には、通常認められない「うゝ」の文字については、調査の対象から除外し、これに代えて、ひらがな表記文に認められる可能性の高い「を」を調査の対象として加えた。

ひらがな文字71文字（濁音、半濁音を含むが、文字「うゝ」は含まない。拗音は含まない。）を用いて、文字ペアを2,485組（ $71 \times 70 \div 2$ ）作成した。これらのペアを1人の調査対象者に呈示することは調査対象者の負担が大きすぎるため、これらを100組程度の25セットにランダムに分割した。また質問紙内における順序効果を相殺するため、2種類の呈示順による質問紙を作成し、質問紙の種類は50種類（25種類の文字対セット×2つの呈示順）となった。

これら50種類の質問紙を用い、ひらがな文字対の主観的な形態的類似性評定を1,555名の大学生に求めた。

【結果】 各文字ペアに対する形態的類似性評定の平均値を算出した。この際、質問紙上でたとえば“あーい”と呈示された場合と“いーあ”と呈示された場合とについては併せて集計し、あくまでも2つの文字の形態的類似性として1つの平均値を算出した。本研究の結果に基づき、ひらがな文字間の形態的類似性、さらには類似語間の形態的類似性について評価を行うことが可能となる。この結果は学術誌「読書科学」に発表予定である。